

J-SAILING

JAPAN SAILING FEDERATION



NO.98

www.jsaf.or.jp



おいしさが織りなす
プレミアムなハーモニー。



おいしさ自由形

プレミアムクラッカー



ヤマザキナビスコ

JSAFからのメッセージ

今年を振り返り

本年4月1日に公益財団法人日本セーリング連盟となりました。

6月16日定時評議員会を開催して役員を選任と決算報告が承認され、新たな体制が確立されました。3年に及ぶ移行申請プロジェクトの努力が実を結んだ結果です。

また世界に羽ばたくユース世代を育成するため2年余り熱心な議論が行われ、次世代ユース制式艇種として420級とレーザー級を選定し、高体連や都道府県連と協調しながら普及発展を目指しています。420艇購入のための寄附を集め、JSAFが新古艇を購入し、半額で希望する県連に納入しています。また、高体連や国体委員会とともに2015年インターハイ及び和歌山国体からの導入に向けて取り組んでいます。

ロンドンオリンピックでメダルを目指して戦いましたがかなわず、残念な結果となりました。本号に掲載されている総括も踏まえ、新委員長のもと今後の選手強化に向けて取り組んでいきます。2016リオデジャネイロオリンピックでのカイトボードの話もありましたが、11月開催のISAF年次総会では日本からの働きかけもあり、従来のウインドサーフィンRS-X級が採用されることになりました。2020オリンピックの開催地は、来年9月のIOC総会で決定されますが、東京開催に向けオリンピック招致委員会も活動に取り組んでいます。

今春、スポーツ振興センターのマネジメント助成金及びJOCコーチへの補助金に関する寄附金が不適切であったとの裁定を受け、該当する金額を返還することにいたしました。また、再発防止と改善の対応を策定いたしました。

昨年の東日本大震災では、全国各地の団体及びセーラーから多くの支援が寄せられました。今夏、宮古商業の高校生6名を米国に派遣し、サンフランシスコのヨットクラブと交流しました。

また、今年は大学ヨット部の卒業生が就職試験に合格し、来年度より和歌山・京都・愛媛・茨城の公立高校に就職する予定です。我々もこのような活動を支援していきたいと考えています。

メンバーのみならず皆様におかれましては、どうぞよい年をお迎えください。来年が素晴らしい年でありますように。

JSAFのメンバーになれば

- ・メンバーズカードが発行され、公式競技参加の資格が与えられます。
- ・会費の一部が傷害保険の保険料に充当され、セーリングの事故による死亡、後遺障害に適用されます。
- ・JSAFの会報誌「J-SAILING」が送付されます。(高校・ジュニアを除く)
- ・各種講習会などに参加でき、資格を取得する際の条件に適用されます。
- ・「J-SAILING」をはじめ、所属する加盟団体からもセーリングに関する各種行事やレース日程などの情報が提供されます。

加入、更新手続きの詳細は各加盟団体にお問い合わせください。

<http://www.jsaf.or.jp/dantai/>



470級でトップ3を走る日経大3艇

第77回全日本学生ヨット選手権

同志社大

総合優勝!!

470級優勝は

日経大

11月1〜4日、滋賀県大津市柳が崎ヨットハーバーで「第77回全日本学生ヨット選手権」が開催された。第1回大会が開催されたのは昭和8年（1933年）のこと。全日本インカレとして親しまれている歴史ある大会に、全国水域予選を勝ち抜いた470級24校72艇、スナイプ級24校72艇が出場。大学ヨットの頂点を目指して4日間の熱戦が繰り広げられた。

レポートと写真／平井淳一

波乱の琵琶湖

琵琶湖は吹かない。その前評判を覆す強風で大会は幕を開けた。

日本海から太平洋へ抜ける前線の影響を受け、第2レースが始まる頃には10メートル以上の南西風が選手を襲った。

この状況を踏まえ、レース委員会はスナイプ級第2レースをキャンセル。470級のレースは進行していたが、トップ艇が最終マークをまわるところでノーレースとなり、全艇ハーバーバックに。いくつかのボートはデイスラスト、リーグ・セール破損などの大きなトラブルを抱えることになった。

水深の浅い琵琶湖で沈めると、マストが底部に刺さり、抜けなくなってしまう。沈艇がそのまま動けなくなり、レスキューボートに救助される場面も見られた。大会運営によれば、マスト破損は15本、艀装品の交換は40件あったとのことだ。

大会2日目以降は、いかにも琵琶湖らしい気まぐれな風に悩まされた。山間から吹き降ろすブローは海面の有利、不利を明確に分けることになり、時にはまっ



スナイプ級で優勝し、総合優勝を飾った同志社大 (リコール番号 34)



470級での強さが目立った日経大チームの面々



8年ぶりの総合優勝を果たした同志社大チームのメンバーたち

たく風がなくなることも。
 第6レースの470級では、出場72艇中52艇がフィニッシュできず、スナイプ級は49艇がDNFとなった。さらに第9レースの470級ではフィニッシュできなかったのが72艇中7艇のみ。65艇がフィニッシュできないという信じられない状況となった。

これを「琵琶湖の風だから」で片づけてしまえば乱暴すぎる。大会初日の荒天救助、出場艇の9割強のDNFが出るようなヨットレースが選手権にふさわしいと言えるかどうか。日本一を決める選手権である。選手には最高の舞台で戦ってほしいし、その舞台をつくり上げる運営組織も最大限の力を注ぐべきだろう。大学ヨットが抱える問題のひとつとして考えていきたい。

圧倒的な日経大の470級

いくつかの波乱はあったものの、やはり上位に名を連ねるのは強豪校である。これまで琵琶湖大会では、地の利を生かした地元大学が活躍してきた歴史がある。

総合優勝が設けられた昭和52年(1977年)以降、琵琶湖で行われた全日本インカレでは立命館大、同志社大、京都産業大といった地元勢が総合優勝を遂げ、他水域校の総合優勝記録はない。琵琶湖以外の大学には鬼門の水域であり、今回も地元勢の活躍が期待された。

レースが始まると470級は、日本経済大が驚異的なスコアで他校を圧倒した。大学ヨットのなかでは新参ともいえる日経大は、これまで9回の出場で6回のクラス優勝を遂げている。しかし、スナイプ級が活動していないため総合優勝に絡むことはない。他校は、確実に上位に入る日経大を避け、主力選手をスナイプ級にコンバートする戦略をとることもあるようだ。



第77回全日本学生ヨット選手権

そのため、470級は日経大の強さがさらに際立つことになっている。第2、3レースでは、日経大3艇が1、2、3フィニッシュを決めるなど大学生のレベルを超えるレースで、最終日には予備選手が登場するほどの余裕を見た。

「2連敗を止められたのがうれしい。レースが始まるまでは、どんなレースになるのか、どんな風が吹くのか心配だったが、初日の強風を走ってチーム全員がふつきた。今回は、だれかが失敗しても、だれかがカバーしてくれているという安心感があった。それが自分たちの強さだと思っています」(外蘭潤平主将)

クラス優勝を果たした日経大は、2年ぶり7回目の優勝。鬼門といわれた琵琶湖大会を圧倒的な力でねじふせた。

同志社大、総合優勝

一方、スナイプ級は琵琶湖を拠点とする同志社大が6年ぶりにクラス優勝。さらに、2004年蒲郡大会以来8年ぶりとなる総合優勝を獲得した。帰着後のハーバーでは、選手や応援に掛けた卒業生が一緒に念願の総合優勝に大歓喜した。

「今年のスローガンは王座奪還。大会前から優勝候補と言われ、さらに地元開催。OBからも期待され、インカレ2カ月前ぐらいから、眠れなくなるほどのプレッシャーを感じていました。でも、チーム全員で楽しいレースができたと思う。4年生はこれで部活動を引退しますが、ほかの大学の選手たちも社会人になってもセーリングを続けてほしい。インカレで戦った選手たちと別の舞台でまた戦いたい」(西村秀樹主将)

終わってみれば、前評判どおり、日本経済大、同志社大の実力が他校を圧倒した第77回全日本学生ヨット選手権。来年の全日本インカレは兵庫県西宮で開催される。



インカレ総合優勝の記

海では気づかないことが習得できた

レポート／蔵道 孝文（同志社大学体育会ヨット部監督）

自主性を重んじた日々のトレーニング

私が監督に就任し、今回が6度目のインカレです。就任前年の小戸インカレでは470級で予選落ちしたものの、スナイブ級優勝という成績でした。

その後、部員が減少し、それに伴い成績も下降の一途を辿りました。そこで行った対策は部員の確保です。

セレクションに頼らず、一般学生を部内で育て上げることに重点を置きました。今回のインカレでレースに出場したメンバーが、入部以来、強化してきたメンバーです。

もちろんこのメンバーを勧誘し、教育してきた卒業生の功績は大きいです。本インカレにおいて、最も多く乗員交代を行っているのは470級で日本経済大学、ついで我々でした。スナイブ級では我々が最も多く乗員交代を行っているものと思われます。選手層の厚さゆえの結果だと思っています。

部員が少ないときは、万が一、レースメンバーが一人出場できない状態になると戦力が極端に低下してしまいます。そのような状態では部内で競争の原理が働きません。ゆとり教育世代の部員には、強制的に競争の原理を働かせねばなりません。

経験者、未経験者を問わず、努力し、成果を上げた者をレースに出場させる。また、他水域のレースにも積極的に出場することにより、情報の収集能力を高め、レース経験を多く積むよう心がけました。レースに出場した部員はそこで得た情報と反省を部内にフィードバックし、部員全員で共有し、対策を立て、日頃のトレーニングで克服するよう努めました。

さらに、部員自らで考え、計画を立て、行動することを重視しました。コーチに最初から頼るのではなく、コーチも頭から指導すること

はせず、必要に応じ修正、指導を行うことを心がけ、自主性を重んじました。やらされるのではなく自らが取り組むという心構えが前面に現れ、部員の表情にも活気がみなぎってきました。

「セーフティーでよいスタート」を心がける

そして迎えた今年のインカレ。琵琶湖での開催ということで安定した風でレースができなのでは、という他大学の不安と同様、我々にとっても優勝への最大の敵は琵琶湖と自分自身でした。

地元が有利であることは百も承知ですが、よく知るが故、琵琶湖の怖さも熟知しています。そこで考えたことは、先行逃げ切りの重要性を強く認識することです。練習においてもその日の最初のレースで如何によいスタートを切るかを心がけました。よいスタートといってもセーフティーでなければなりません。「セーフティーでよいスタート」と口で言うのは簡単ですが、高い技術と精神面のコントロールが必要です。

今回、第1レースがよい形で入れたのも、日頃のトレーニングの成果です。他の競技と違い、何レース行えるかわからないヨットレース。とくに琵琶湖では、追う立場の選手が精神的に負担を強いられます。そこで優位に立てたことは、今回の総合優勝をつかむ上で大きな要因だったといえます。

海に比べ風には恵まれないものの、その環境を受け入れ、逆にそれを生かしたトレーニングを行うことで、海では気づかないことが習得できたと確信します。

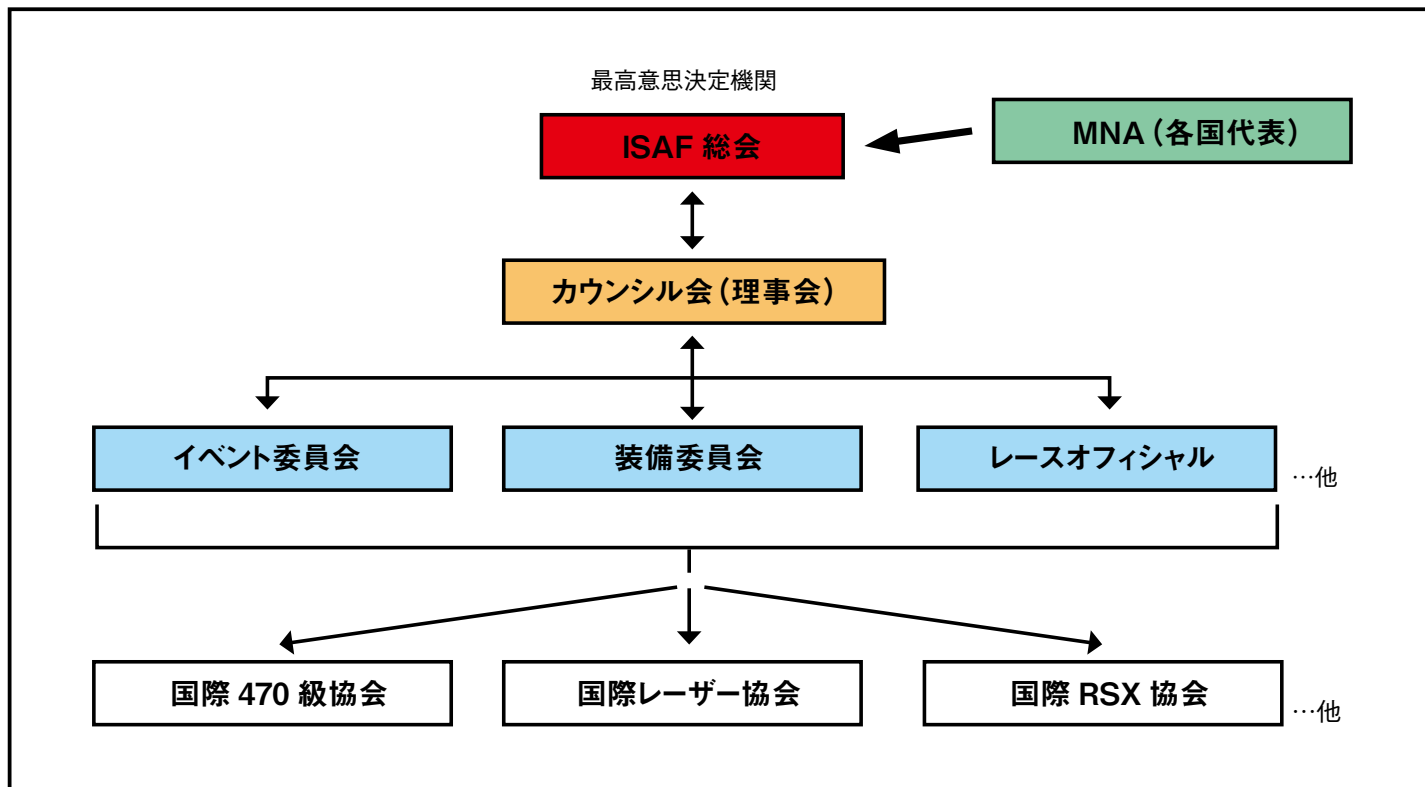
成績が低迷していた同志社ヨット部ですが、今回優勝できたのは部員、コーチ、OB会の底力の結集です。そして、学生ヨットに携わる多く関係者の方々に感謝し、インカレが学生にとって価値ある戦いの場でありつづけることを祈っています。

2012年 ISAF年次会議報告

「RS:X 復活、そして ISAF とは」

初めて ISAF 年次会議と総会に日本代表として参加しました。
 大方の JSAF メンバーが持つであろう「ISAF って何しているところなの」という素朴な疑問から、
 JSAF や艇種協会が ISAF とどのような関係にあるのか、
 私が委員長を務める JSAF 国際委員会の役割は何かについてなどをご報告します。

レポート / 堤智章 (JSAF 国際委員会委員長)



ISAF 年次会議と総会について

ISAF (国際セーリング連盟) は、JSAF と各艇種協会が所属している世界的なセーリング競技における最高意思決定機関になります。

会社組織にたとえると、各国代表 (MNA) メンバー オブ ナショナル オートソリテイ と呼ばれます。JSAF もこの一つです。が株主であり、株主総会に相当するのが ISAF 総会と考えていただければ結構です。

総会の下部にはカウンシル会 (理事会) が存在し、その下に各委員会が存在しています。先の例でいうと、カウンシル会は会社の取締役会に相当し、各委員会は事業本部になります。(上図参照)

オリンピック艇種を決めるための経緯を例にとつて説明しましょう。

たとえば、ある艇種をオリンピック種目にした場合、その艇種の国際協会 (もしくは MNA、加盟各国協会) がイベント委員会に対し、オリンピック艇種としてその艇種を提案し、装備委員会が艇の評価をした上、イベント委員会で検討し、カウンシル会へ意見を具申します。その後、カウンシル会で決議を行い、その承認を ISAF 総会で決議するという流れになります。

ここで大切なことは、オリンピック艇種といった大きな提案ではなくとも、たとえば JSAF のメンバーが「セーリングのよりよい方向への改善」などを考えた場合、この提案を日本から行ってもよいということです。些細なことでも、ISAF 総会へ議案を上げることができるのです。

さらにその前段階として大切なことは、JSAF 内において各艇種協会や各種委員会と国際委員会が密に連絡をとつ

て、国際委員会を窓口として ISAF に意見を具申するノウハウを持つことです。そして、国際委員会は外交活動を通じて、その意見を民主主義の総意として世界に認めてもらうことができる力を持ち続けることがとても重要になってくるのです。

ここ数年、日本はオリンピック艇種の選定において、河野会長以下国際委員会メンバーが積極的に各国の調整役や議案提出役を務めてきました。世界各国の代表は、理にかなった考え方である日本案を支持し、結果的に日本の考える艇種構成になりました。

しかし、オリンピックの艇種選定のみならず、もっと大きな目でセーリング自体を楽しく豊かにするために、「日本発の提案、動議を増やそう!」と考えていたとき、どんどん国際委員会への相談が増えればと思っています。

これまで、国際委員会は JSAF メンバーにとつてその活動がわかりにくい委員会であったかもしれませんが、今回の ISAF 総会では RS:X 級をオリンピック艇種に戻した外交活動を成功させた実績を上げました。

これは、国内 RS:X 協会が河野会長、国際委員会へ相談を持ち込んだことから始まり、各種のロビー活動を地道にした上で、日本の提案に対して、世界 114 カ国のうち、51.7% の国々が賛同してくれた結果であることをご理解ください。

それでは、今年の会議で話題になったことをご紹介します。

今年の年次会議のトピックス

ISAF 年次会議と総会の詳細については、JSAF ホームページの国際委員会のページに掲載させていただきますが、本稿ではいくつか大きなポイントについてご報告します。

IRCコングレス2012報告 「IRCの将来を議論」

2012年度のIRCコングレスが英国ウインザーで開催された(2012年10月13日、14日)。

日本からは、日本IRCオーナーズ協会会長の斜森保雄氏、JSAF外洋計測委員長の吉田豊氏、IRCレーティングオフィスの角晴彦氏の3名が参加した。

レポート/角晴彦、写真提供/吉田豊

はじめに

世界的な不景気の中、各国のIRCフリートは全体的に縮小傾向にあったが、中国、トルコ、オランダ、日本などでは増加が続いている。フリートの縮小は、新規アプリケーションの減少と船齢の上昇を伴っている。世界的にイベント自体への参加が減っているという報告からも、景気低迷による、レジャーの手控えムードがある模様だ。

RORCは将来のIRCの方向づけを明確にする必要を感じており、オーナー、レーティングオフィサー、ルールオフィサーが協議しながら現状の分析とサービスの向上を目指すための方策をなんとか探り出したいとの気持ちがある。そこで、今回のコングレスでは、本題から少しずれるが、しかし非常に重要な「IRCの将来」というテーマで議論が交わされた。

ワンデザインクラス以外のキールボートにおけるIRCシステムは、比較的高いエンドユーザーのものであるという認識が、少なくとも一般ユーザーの中には根強い。しかし、IRCのポリシーは、決してグランプリイベントを主眼に置いておらず、すべてのボートに対してレーティングを与えるものであるから、この認識は正しくない。

ところが現実的にプロのセーラーが乗るレースも、ナショナルチャンピオンシップもIRCの下で行なわれ、オーナーが安くない代金を払い、公平なレーティングを得る場合、クラブレースだけに留まるオーナーにとつてのIRCは、あまり馴染みのないものとなるのは、世界に共通していることのようにだ。

今回のコングレスで明らかになったのは、クラブ単位のレースとIRCイベントに連続性を持たせることが、重要であるということだ。つまり、PHRF(ボー

ツマシャードスティック)のようなパフォーマンスハンディキャップをいかにして、IRCの予備軍にしていけるか、もしくは、いかに協調していくかということである。

コングレスでは、PHRFはIRCの脅威とはならず、協調することにより、共に歩んで行くべきものであるという結論に至っている。また、そのためのデュアルスコアリング方式を推奨しているという結論にも至った。これはまさに日本の状況を物語るに過ぎない。PHRFを確立させようという動きが日本にあるが、やはり理想は、より高度なレーティングシステムと連続した繋がりを持たせることである。

一方、来年のルールの整備という重要な点については例年と変わらず、RORC、TC、各国のオーナー協会、ルールオフィサーの代表者が、来年のためのルール整備に向け、時間いっぱい議論が繰り返された。

日本からは、オーナーズ協会の意見を反映して、「ボートのモディフィケーションを行なった際のTCCの判定が、元々異なるデザインとしてまったく同じデータを提出する場合と評価方法が違い、結果としてのTCCも変わるのではないか」という質問を行なった。これは、リーグなどのモディフィケーションを施したボートが非常に高い性能を出した事例があり、もしモディフィケーションではなく新デザインとして申告した場合、異なる結果が出たのではないかと疑問から出た質問であった。

結果として、RORCのテクニカルコミッティの回答は、「まったく同じデータを持つ2艇は、たとえ一方がモディフィケーションによるもの、他方が新デザインによるものでも、両艇のTCCは同一になる」というものであり、日本側の疑問は否定された。

以下に議事録を紹介する。

① 議題にない要審議事項

◎ボートデータ

開示データを増やすことは、デザイナーによるデザインの最適化を助長することが懸念されるため、テクニカルコミッティとしてはやりたくない。しかし、レーティングオフィスの任意の艇のデータファイルとその艇に対して提供することは行なうべきとの考えが示された。

◎新機軸

新機軸に対するテクニカルコミッティの取り組みは、四辺形ヘッドセールの対応案にその例がよく表れており、後述の議題で審議されている。

◎軽量艇

「軽量」という表現は主観的なものである。判断はテクニカルコミッティに委ねられるが、超軽量艇とレースボートをすべて含ませようとするのは危険だ。今年のレース結果から見ると、バランスは適度に取れていると考えられる。オーストラリアからの報告によると、アンケートの結果、48%ほどの回答者が「IRCは軽量艇の開発を妨げている」感じており、その結果、多くのセーラーが機会を失い、意欲を削がれる結果を生んでいる。

◎HPR (High Performance Rule)

RORCはHPRの運用に関わることを辞退したと報告された。USセーリングのメジャラタン・ノランは、RORCがHPRに関わることは望ましいことと、今後も提案を続ける意向であると伝えられた。現時点でHPRの具体的な進捗は見られない。しかしテクニカルコミッティは、HPRの進み具合を今後とも確認し、IRCのその分野に対するプレッシャーを和らげるためにも、レース志向の強いボートに対する適当なルールとしてHPRを機能させることも視野に入れることを約束した。

◎デュアルスコアリング

テクニカルコミッティは、パフォーマンスハンディキャップを向上させるために、RYA、ECHOその他の団体と協議し、デュアルスコアリングを身近に、そしてPHSからIRCへの移行を容易にすることを目指すこととした。

◎IRCのプロモーション

RORCはプロのPRエージェントにプロモーションを依頼しようとしたが、エージェント自身が貢献することが難しいと判断したため計画を断念したと報告された。プロモーションに関してRORCは、将来的にどのような段階を踏むべきか模索中である。

② テクニカルコミッティからの報告

テクニカルコミッティが危惧するのは、世界のIRCフリートは2011年8月末時点で2%ほどの減少を見せ、さらに2012年8月時点には8%近い減少を示した点だ。

テクニカルコミッティは、この落ち込みは世界経済の影響によるところが大部分を占めると考えている。また、レガッタのエントリー数が世界的に減少傾向にあることが確認された。

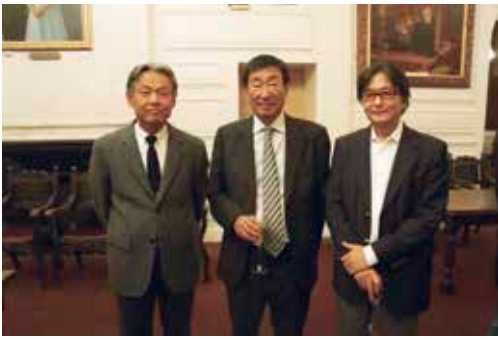
③ IRCの世界的傾向

統計によると、新規申告の減少に伴いIRCフリートの高齢化が見られている。統計データはIRCが引き続き広範囲なボートサイズと船齢で使われていることも示している。

④ 2013年IRC規則変更のブローザル、検討および決定事項

IRCテクニカルコミッティおよび各国代表によるブローザルを審議した結果、2013のIRC規則で以下のような変更があり施行される。

規則11.1が変更され、規則21.6.1



コンGRESSに参加した吉田豊、斜森保雄、角晴彦の各氏



会場はウインザー城にほど近く、近衛歩兵連隊の軍楽隊にも出くわした

(b)が規則11.2となり、新たに規則11.3が加わり、IRCC規則の国内規程を作ることが可能になった。

◎規則17.2.2が変更され、可変パラスタ(つまり水)は計測状態で含まれないことを明確にした。

◎規則21.3.4(c)が変更され、スピネーカーがスピネーカーポールに書き換えられ、誤りが訂正された。

◎新しく規則21.1.5(h)が加えられ、分割可能なセイルを禁じる。

◎新しくヘッドセイルアッパードス(HUW)が定義され、規則21.7.1でHSAの計算にHUWが使われるよう変更され、さらにHHBを削除してHSAの計算における抜け道が閉じられた。HHBの記載はすべて削除された。

◎ヘッドセイルフットオフセットの新定義が加わり、規則21.7.1が変更され、フットオフセットに制限が加えられて、ヘッドセイル計測の抜け道が閉じられた。

◎クルー体重によるクルー数のオプションが削除され、クルー体重(クルー数×85kg)がデフォルトとなるよう規則22.4.2が変更された。規則22.4は引き続きリース公示により変更可能。

◎Eの定義が規則の抜け道を防ぐために変更された。

◎ヘビーウェザージブの定義が変更され、リーフポイントの禁止の項目が削除され、ISAFOSR定義に準ずるようになった。

◎規則8.1.2、規則21.7.3およびMUWの定義について、内容を変更することなく、誤植の訂正を行なった。

⑤出席している各国ナショナルオーソリティーからのレポート(規則変更のためのサブミッションは含まず)

文章によるレポートが、オーストラリア、英国、香港、日本、マルタ、トルコ、

米国からあり、以下の議論が交わされた。オーストラリア

ナショナル選手権が国内を転戦し、アウディーハミルトンアイランドレースウィークの一環として開催された。日本

質問に対しマーク・アウイン(RORCテクニカルディレクター)は、「もし2隻のボートが同一のデータを持つていれば、たとえ一方のボートがボートのモディフィケーションによってそのデータを達成したとしても、2隻のTCCは同じになる」との回答を行なった。口頭によるレポートは、カナダ、フランス、ドイツ、アイルランド、スウェーデン、タイ、UAEからあり、各国のIRCCの現状が報告された。

⑥IRCCの将来の方向性

RORCレーティングオフィスを代表してマイク・アウインがプレゼンテーションを行った。

テクニカルコミッティの危惧は、新アプリケーションや新艇の数が減少している点であった。また、RORCレーティングオフィスが、主にIRCCの非ユーザーを対象にしたアンケートの主要な結果が報告された。最初の議論は、IRCCイベントに参加するプロフェッショナルセーラーの存在に憤慨しているケースが多くある点であった。チェアマンは、コンGRESSに、次の質問を向けた。

①すべてのボートにレーティングを与えるというIRCCフィロソフィーはまだ有効か？

②HPRを脅威と見るかチャンスと見るか？

③PY/PHRFを脅威と見るかチャンスと見るか？

④IRCCを人気ある銘柄にするにはどうしたらよいか？

長い議論を経て、以下の点が明らかとなった。

◎IRCCの複雑さが増し、多くのセーラーにとってよく理解できないものとなっている。

◎キールボートのレースは、一般に下降傾向にあり、この傾向の打破にまず目を向けなければならない。

◎IRCCはハイエンドのレーシンググループであるとの見方が根強い。よって、IRCCはすべてのボートのためのものである点を強調しなければならぬ。

◎IRCCは軽量艇(超軽量ではない)にも適用していることを考慮するべきだ。

◎HPRは脅威ではない。非常に軽量で過激なレースボートを惹きつける可能性を持っている点はIRCCに利益となる。

◎パフォーマンスハンディキャップシステムは、キールボートレースのスタートとして自然な選択であるので、IRCCに対しても自然の恩恵を与える。IRCCにとってチャンスである。

◎長い議論の末、コンGRESSは、各ルールのソリテは、IRCCのプロモートを積極的に行ない、その一環として、オーナーの希望を理解するために、可能で実践的であれば、アンケート調査を行なうべきとの結論に達した。

◎IRCCレーティングオーソリティーは、世界中のIRCCを支持するのは当然であるが、唯一のプロモーションの主体となるには非現実的で、負担が大き過ぎる。

IRCCポリシーステアリンググループとの協議の結果、IRCCテクニカルコミッティは、年に1つか2つのイベントにしか参加しないボート向けに、制限付きIRCC TCC(Umited Validity IRC TCC)の発表を検討した。未だに多くの不明瞭点があるものの、2013年度に英国でトライアルを行なう意味を認めるに十分な利益を生む可能性を持っているという結論に達した。このトライ

アルは発表されたばかりだが、大方好意的な反応を得ている。もしトライアルが成功すれば、LV TCCは将来的に、他の国でもローカルIRCCルールオーソリティーの下で紹介される。実用性と悪用の可能性に関する危惧が表明されたものの、コンGRESSは、大方この発案を受け入れた。

コンGRESSは、RORCレーティングオフィスがRYAその他と協力し、ポーツマスヤードスティックパフォーマンハンディキャップを英国で復活させようとしていると報告を受けた。この目的は、キールボートのレースへより多くの参加を奨励し、IRCCの使用もそれに伴い増加させるといものである。こうした流れの中では、ヨットクラブにPYとIRCCのデュアルスコアリングを使うことを奨励することも含まれており、それは一般的なフリーのクラス分けと異なるものである。これは、アイルランドで成功しているモデルと調和するものである。

コンGRESSは、また、RORCレーティングオフィスが、来冬季に地方への一連のツアーを計画しているとの報告を受けた。この意図は、地域すべてのクラブが一方所に集まり、クラブ間の協調を強めてもらうことである。このような機会はまた、計画されているPYの改造プロモーションにも利用される。

⑦ISAFミレーティングへのサブミッションの審議

11月に行なわれるISAFミレーティングへのサブミッションの内容について、IRCCコンGRESS内にて討論が行なわれた。今年IRCCコンGRESSからのサブミッションの提出がなかったため、IRCCに関わりのありそうなサブミッションに関して意見交換が行なわれ、ISAFミレーティングへ参加するIRCC関係者らの意見調整を行った。

全国安全指導者養成講習会レポート

多彩な講習が行われた2日間

今年の「全国安全指導者養成講習会」は

国体の開催準備のために改修工事が始まった若洲ヨット訓練所で、11月17日、18日の2日間に約40名が参加して行なわれた。

報告 / JSAF指導者委員会



漆谷伸介氏



長村美幸氏



河野博文会長

JSAFの普及活動

セーリングの普及は日本セーリング連盟の存在そのものにかかる大変重要な施策です。

その幅は大変に広く、単に競技人口の増加を図るだけが普及ではありません。海洋スポーツや水辺のレクリエーションとして、生涯にわたりエンジョイできるものとして、是非とも多くの人たちにヨットに乗ってセーリングを楽しんでいただきたいものです。

一昨年新たに施行された「スポーツ基本法」では、「体を動かして楽しむのもスポーツ、見て楽しむのもスポーツ、スポーツを支える活動もスポーツ」といった新たな考えが示され、スポーツは国民が健康で幸せな生活を送るために欠かせないものと位置づけられました。

セーリングは子どもから大人まで、男女を問わず、障害のある人もない人も、競技を楽しむ人もクルージングを楽しむ人も、シームレスにセーリングに関わることができるところのスポーツです。まさにスポーツ基本法のいうところのスポーツであると思います。



盛りだくさんの内容に耳を傾ける参加者

公益財団法人日本財団の助成事業

日本セーリング連盟は、公益財団法人日本財団の助成を受けて普及事業を実施しています。

普及事業はセーリングの未経験者を対象としたセーリング体験会と普及を図るための人材養成講習会からなりますが、モーターボート競走の収益金の一部をもって支援していただいています。長年にわたるこの助成事業で多くの方々がヨットと出会い、その楽しさや爽快感を味わっていただきました。

今年は震災被災地の宮城県での「頑張り東北セーリング」（本誌前号で紹介）、長崎県での「国体2年前盛り上げセーリング」などを開催。地域の元気再生、地域の魅力発見をもたらすセーリング体験会として地域貢献もできました。またセーリングの普及を牽引する人材育成や教職員向けセーリング指導者養成の育成も行っています。その助成事業の一つに「全国安全指導者養成講習会」があります。

この事業は名前のとおり、普及に欠かせない指導者の養成、しかも安全に関する知識と技術を有する指導者、つまり



西岡一正副会長



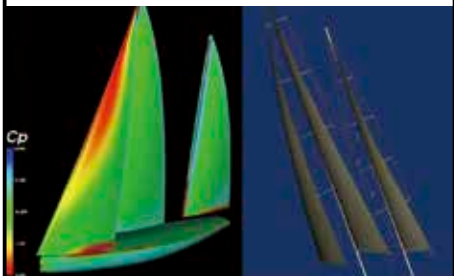
小山泰彦オリンピック招致事務局長



柳俊晴指導者委員会アドバイザー



**シーズン・キャンペーン
お得なセットを用意**
クルージングからレーシング・セイル
各種オーニングまで
早春はニューセイルで爽快セーリング
メンテナンスにも適用
修理・リカット、セイル洗浄
www.quantum-jpn.com
japan@quantumsails.com
ディンギーからクルーザーまで
一味違うセイルを楽しんでください。



**ワッツ・マリン
シーズンキャンペーン
実施中**

～オリジナル制作～

- ・ポート&セイルカバー
- ・フェンダーカバー
- ・マットフェンダー
- ・カスタムオーニング
- ・フレーム加工

～修理、加工、サービス～

- ・リギングメンテナンス
- ・ウインチメンテナンス
- ・カバー全般修理&改造
- ・ソフトグラス交換&清掃

～販売～

Donaghys ヨットローブ(加工有)
艇艙装品

www.wattsmarine.jp

(株)セイルス・バイ・ワッツ・ジャパン
本社ロフト

〒238-0233 神奈川県三浦市向ヶ崎町 8-40
電話:046-882-5451 fax:046-882-4319
関西営業所(新西宮 YH)

〒662-0934 兵庫県西宮市西宮浜 4-14-3
電話:0798-23-6410 fax:0798-23-6420



森信和国体副委員長



大坪明外洋安全委員長



岡嶋佳治高体連ヨット専門部部长

今年のテーマはロンドンオリンピック報告、外洋レースの安全対策、ジュニアユース世代の制式艇種展開状況報告、海上保安庁や運輸安全委員会から海難事故についての最新情報提供など盛りだくさんの内容で、安全の確保についての活動のみならず、今後の指導者のあり方を議論する場となりました。

今年度の開催概要
今年のテーマはロンドンオリンピック報告、外洋レースの安全対策、ジュニアユース世代の制式艇種展開状況報告、海上保安庁や運輸安全委員会から海難事故についての最新情報提供など盛りだくさんの内容で、安全の確保についての活動のみならず、今後の指導者のあり方を議論する場となりました。

一方では、外洋安全については大坪明外洋安全委員長、漆谷伸介氏(運輸安全委員会事故防止調査官)、長村美幸氏(海上保安庁東京海上保安部航行安全第一課第一海務係長)から、「事故防止に対する意識を高めるための情報共有をするのとどまらず、膨張式ライフジャケットの使用方法やメンテナンスで注意すべきポイント」など、より具体的な実演についても熱心に確認が行われました。単に設備をすればよいというものではなく、活用する乗員やオーナーの意識を高めていかなくてはならないという、意見が参加者も多数出てきました。



司会の棚橋善克指導者副委員長



川北達也指導者副委員長



斉藤威普及委員長

今年の開催概要

過去にはセーリングの普及に必要な組織やシステムについての講習を開催しました。特に欧米では馴染みのヨットクラブの歴史と現状について学び、日本でも子どもからお年寄りまでが楽しめる地域のスポーツクラブがより多く誕生するよう、クラブの運営、セーリングの指導ができる人材の育成に努めてきました。あるいは、ほかの水辺スポーツやレクリエーションとの連携、地域の活性化とセーリングなど、関連する方々との意見交換の場として講習会を開催してきました。

さらに、小山泰彦オリンピック招致事務局長から、セーリング競技についてはISAFからは開催要件を満たしているとの認定を受けたことが報告され、参加者から2020年に向けて盛り上げていくこととの意見も出されました。

また、河野博文会長からは、ISAF総会での日本提案によってウインドサーフィンRS:X男女種目が復活した経緯が説明され、ISAFにおけるJSAFの位置づけが少しずつ上がってきたことも報告されました。



斉藤威普及委員長

リオ五輪、そしてその先をめざして「選手強化のあるべき姿について」

11月10日、JSAFオリンピック特別委員会（オリ特）、ジュニア・ユース育成強化委員会が中心になって「今後の選手強化のあるべき姿について」の意見交換会が行われ、参加者から様々な意見が出された。概要をお伝えする。

①意見交換会の目的

まず、意見交換会開催の呼びかけの文章を紹介する。

オリ特の役割はオリンピックを目指すセーラー、コーチを支援し、メダルを獲得できる強化体制を構築することです。

一方、ロンドンオリンピックの不調から、おそらく文科省、JOC、スポーツ振興センター（含むJOC）等からの資金的援助は2割近くが削減されるのではないかと危惧されています。

またマルチサポートの対象種目からセーリングが外されることも考えられます。さらに、オリンピック活動資金の内、次年度に繰り越すことができる余剰金は、寄付問題解決のためJOCへの返却資金として使わざるを得なくなり、底をついています。その結果、今までオリ特が果たしてきた役割の一部は、縮小せざるを得ません。

オリンピックでメダルを狙うという視点からは、企業チームの努力だけではなく、オリ特が「競争の場」を提供することが重要だと考えています。「競争の場」にセーリングの最新技術を導入し、競争を通じて選手の意識を高めることが期待できます。また海外からコーチと選手を

招くことにより、情報交換と選手、コーチの技術向上を図ることもできるとも期待しています。

さらに長期的な視点から、ユース世代の育成、強化を促進するための場できると考えています。ユース選手、指導者を招聘し、オリンピックを目指す選手たちと広く接触し、長期的な選手育成とコーチ陣のレベルアップを図りたいのです。この試みは8年から12年の長期にわたると考えています。

一方で、このような体制を支えるための財務基盤を作る必要を強く感じます。オリンピック選手強化を事業と捉え、一般企業を含めた支援体制を構築する必要があります。

現在、これまでの反省からの改善点と合わせ、基本方針の叩き台をまとめています。また、JSAF理事会から今後の活動に透明性を求められており、これを担保するために諮問機関を設置することも考えています。

これからオリンピックキャンペーンを始めるコーチ、選手、支援関係者に、オリ特に期待し、求める役割をお教えいただきたいとの趣旨で今回の意見交換の場を設けました。皆さまの意見を伺い、リオデジャネイロ・オリンピックに向け、そしてその先を見据え、勝てるチームづ

くりを目指したいと考えます。（西岡一正オリ特委員長）

②飛び出した様々な意見

この呼びかけに応じて参加した方々の意見を抜粋して紹介する。それぞれの立場から発するユニークな意見が出された。

企業チーム代表 坂本亘氏（日吉薬業所属、シエスタチーム）

レーザークラス・ユースの選手強化についてオーストラリア、ニュージーランドなどの海外からコーチを招聘し、練習方法、トレーニング方法などのノウハウなどを伝授してもらおう。年間3〜4回、各1週間開催。場所は和歌山ナショナルトレセンで、1カ月、3カ月単位で強化。年間予算（推定）は年4回で200万円くらいを想定。

高体連のFJから420への動きがあるが、レーザースタンドクラスの採用もお願いしたい。インターハイ・インターカレの後の活躍の場としてオリンピックというパスウェイを提案したい。

日本470級協会理事 信時裕氏
470級協会のミッションは普及活

動。国内の選手層を厚くし、国内レースでの人材を発掘し、オリ特への橋渡しという構図で、オリ特と同一の視線で強化をしていきたい。

現状はトップ層の下の選手層が薄い。また、国内での競争の場がない、次世代の女子がいない、全日本470のレベルは10年前と比べて低下している。

また全日本470への憧れや意欲が薄れ、出たいと思う選手が少ない。学生はインカレで燃え尽きてしまう、学校の都合で全日本に参加できない。卒業してセーリングを続ける選手が少なくなり、社会人選手が少なくなっている。

470級協会は、「スタープラン」というものを実施し、協会から選手への支援を3年前から開始した。これは海外遠征の金銭的支援を行うもので、海外で習得したノウハウを日本国内に還元してもらおうという趣旨。また、学生のトップ選手へ資金を出し、ジュニア・ワールドの遠征を支援。3年前にスタープランで支援したジュニア・ワールド出場者がインカレで活躍したという実績もある。

日本OPP協会理事 田中金江氏
OPP協会は24県、44クラブ、340人

ほどの選手が登録している（選手登録以外も含めると総勢500人程度）

全日本選手権は140人ほどが参加。全日本は海外遠征1次予選となっており、トップ40人が翌年3月の最終選考会へ進出する。その結果、世界選手権、ヨーロッパ、アジア、北欧選手権へ各20人ほど派遣している。

海外派遣決定後は5月に合宿し、夏休み海外レース派遣という流れ。世界選手権にはコーチを帯同している。世界選手権には若干の資金的な補助はあるが、ほかのレースは自己負担。

OPPは次の艇種が決まらない。40人ほどいる中学3年生の選手で全日本に参加するのは20人程度。高校ヨット部で活躍するのは15人程度。大学は高校でできなかった選手が戻ってくるので人数は若干、増加の傾向。

インターハイ、インカレの上位はOPP経験者が多い。合宿予選全日本選考会の道筋は明確で、そこまでのモチベーションを保つシステムはあるが、海外遠征参加が決定した時点で止まってしまう。海外レースで上位に行くノウハウがない。

OPPの選手たちは必ずしもアスリートタイプではない。小中学生向けのトレーニング方法などがほしい保護者は高校、大学までは見通せるが、オリンピックまでは目がいかない。JSAFに夢を持って

るような仕組みを作ってほしい。

今のJSAFのシステムでは子どもたちには「SAILING」が届かない。様々な艇種の情報が載る本誌は子どもたち、その親たちの視野を広げることになると思われるので、OPの子どもにも届くように検討していただきたい。

北京五輪出場 **松永鉄也氏**（スリーボード所属
キャンペーンはアネカからスタート）

選手が発言できる場を作ることが大事で、選手会などの組織もよい。

オリ特的決定事項を報告されるだけで、選手の立場からはそれについては発言できない。選手のための組織なので、選手の理解、ニーズに合わせる必要ではないか。選手は基本的にフィジカルトレーニング、練習に集中したい。

470級の現場からの意見としては、ポートスピード、パフォーマンスがトップと下の層で、とくにダウンウインドで差がある。日本国内だけで練習しては限界がある。海外の選手とのトレーニングがとっさりばやいのではないか。ナショナルチーム（NT）は海外遠征中のレースの中でそれを学んだが、レース以外でそのトレーニングができれば、レースでポートスピードに集中できる。

北京五輪前は強化合宿があった。ロンドンのときはなく、練習・トレーニングは企業チームまかせになっていた。合宿の場があれば、切磋琢磨できる。

強化合宿があれば、NTとその下の層のギャップが縮まる。合宿は学生も入れて、様々な架け橋をつくる。とくに今回のキャンペーンでは、NTが恐怖を感じるようなNT以外の選手がいなかった。学生の中にも恐怖を感じさせる選手が少なくない。切磋琢磨し、常に緊張感をもって練習したいが現状はそうではない。大学はインカレ主体だが、それでも思いが

ある選手がいるはず。それら選手との架け橋、相談役にオリ特がなってほしい。

ナショナルトレーニングセンター **中村和哉氏**

地域には優秀なコーチ、選手がいて、みんなが集まる場がレースである。NTCはそのような各地域の優秀な人材が集結できる種目間をつなげる場、NTの集合場所、情報交換の場、切磋琢磨する場としていきたい

日本競合選手ト部監督 **三船和馬氏**

選手育成の場を考えると、日本は学校というシステムの中が合理的。

選手とコーチは相互の理解が必要。ジュニアは基礎を叩き込むが、高校・大学は自分で考える力を育成することが必要。そこで、コーチングが非常に大事になり、技術的にも選手と一緒にやる必要がある。

デジタル解析ができるようになった時代だからこそ、目標の数値化ができる。

また、レースそのもののクオリティを上げる必要がある。現状は正確な技術が使用できるレースになっていない。

正確なポートスピード、バランスをコーチングする必要がある。筋力・持久力のある選手に対し、いかに技術的レベルアップをはかれるかが重要。日本は世界を追いかける立場、それでは金メダルはとれない。先を行く知恵が必要。

470級は日本人に向いている。まずはその470でメダルをとってから、ほかの種目に行くのがいいのでは。メダルを取らないと、ワールドランキング1位でも失敗と言われてしまう。

選代表 **山田寛氏**（オリンピックキャンペーン
キールポードで活動）

JSAF主導の強化に賛成。今までなかったのはなぜか？ JSAFと企業チームの間で、人間関係がうまく連携が

とれていなかったのではないか。好き嫌いやからの脱却が必要。

また、きちんと教えられるコーチが必要ではないか。これまで、個人的には技術を説明してもらったことがない。NTの選手には説明しづらいかもしれないが、感覚的に分かっている。理論でわかっていない選手が多い。そこを修正できるコーチが必要。

ロンドンに向けて、風の調査やマスト開発の新しい試みがあった。今までとは違った試みだったので非常によいと思う。実際それがどれだけ役に立ったかはわからないが、選手の考えを汲み取ったものであったのか、選手と連携し、実際に使えるようにしていく必要がある。

皇田大学ヨット部監督 **島山知之氏**

インカレでも風の調査、海面の調査をやったことがあり、それをちゃんと理解した選手が結果を出した。オリ特的調査を開示するのがいいのではないか。

ダウンウインドの課題という話が出たが、それにはどう取り組んだのか？ レースに臨む前にハンドリングがありスピード、そしてタクティクスがある。オリ特が組織として課題に取り組むべきではなかったか。

国内選手層の格差が広がりすぎていて、NT選手が一般や学生選手に対してレクチャーする場があってもいいのではないか。学生のレーススケジュールに合わせてNT選手の講習会があれば、学生のモチベーションにつながるのでは、交流会のような機会を設けてほしい。

高専ヨット専門部長 **岡嶋佳治氏**

高校生に関しては、競技より教育が主眼。自分で考えて実行し、得た知識を使えるようにと教育している。これらがベースとなって強くなっていく。高校生の活動には顧問が必要で、顧問

指導者の育成が必要。顧問の先生の知識が少ないので、この強化も必要。また、高校生の実際の活動は2年間しかない。高体連ヨット専門部は、資金不足なので活動はほとんどできない。各水域にJSAFからコーチを派遣し、指導者や選手育成ができればよいのでは。コーチがない水域もあるので、派遣してもらうのもひとつの方法ではないか。

ノースセルジャパン **菊池誠氏**

オーストラリアのコーチ、ピクター・コバレンコがなぜかこのかというところ。彼は選手のモチベーションを上げるのがうまい。各選手の目標・テーマを決めて合宿をする。練習時間は基本3時間（帆走は2時間ほど）。

たとえば、10ノット以下のアップウインドのスピードアップで2時間という練習メニューの場合、10ノット以上になる練習をやめる。10ノット以下で行うということを徹底している。

2ポートシステムの導入は、パフォーマンスを数値化し、GPSを用いて評価し、個々のテーマを選別できる。

日本チームはチューニングに頼りすぎている。オーストラリアは身体を使っている。セーリングをする。キネティクスとセーリングスキルが伴っている。SailFitという言葉があるが、これはフィジカルの要素が強い。いつものセーリングでどれくらいセーリングができる体力があるかという視点が必要。

フィジカルが強く、ハンドリング・コントロールができないと2ポートシステムは活きない。オリンピック・レベルの選手では活きるが、しかし、パートナーが同じ能力でなければ意味がない。

レースに奇跡はない。歴史のあるクラスではなおさら奇跡は起こらない。コーチ、選手は地道な練習が必要。また、ルールに精通することも大切。

判例集を全部覚えていなくてはならない。ジュリーを呼んで勉強をもっとする必要がある。プロテスト能力をオリンピック選手の選考基準に入れるものではないか。

3 今後の強化について

これらの発言の後、西岡オリ特委員長から、今後の強化のあり方を探る意見が提出された。

「競争の場」が必要だが、どのような場にするかがキーポイントとなる。場を作っても得るものがなければならぬ。得るものを与えるのがオリ特的使命。データもノウハウもあるはず。スタッフも勉強が必要。

また、場を作ることによりユース選手も巻き込む。470級の選手と同じ海域を走るだけでもよい。背中を見せるだけでもよい。そして、コーチとの連携を図る。情報の共有化、コーチのレベルの引き上げがポイント。

もっとも重要なことは、資金の確保。今の計画では5500万円の事業資金をJSAFが負担しなければならぬ。そのためには、スポンサー価値がある場にして、資金を募りやすい環境にする必要がある。また、一過性ではなく、持続的にやらなくてはならない。これにはJSAFの組織としての理解とバックアップが必要。

そのためには、諮問委員会などを設置して組織としての透明性の確保し、そして多岐にわたる会計・事務負担の軽減を図ることも重要になってくる。

*

このページで紹介した以外にも、様々な意見、提案が披露された。紙幅に限りがあるので、会議録詳細はオリ特HPを参照いただきたい。

SPICE
S&B
HERB

今夜は
パンと食べる!

濃いシチュー



から、ホワイトショコラ新発売

ホワイトチョコレートの旨みとコクが溶け込んだ、上品でやわらかな甘さ。



1. ホワイトチョコレート使用!
濃厚なコクとミルク感
2. クリーミーなミルク感が、
パンによく合う!

冬季
限定

濃いシチューホワイトショコラ

S&B 濃いシリーズ ラインナップ

今年は、生クリームがすごい。

2種類のブイヨンの旨みが濃いミルク感を
一層引き立てた、濃厚クリームシチュー。



濃いシチュー クリーム

濃縮赤ワインペーストの豊かな甘酸っぱさと
デミグラスソースの奥深いコクと旨み。



濃いシチュー ビーフ

New 洋食屋さんで味わうような
濃厚でデミグラスソースの奥深い味わい。



濃いハヤシ

エスビー食品株式会社

2012年 ロンドンオリンピック 報告

7月27日から8月12日まで英国・ウェーマスで開催された第30回ロンドンオリンピックセーリング競技に関して、JSAF 日本代表選手団から報告書が発表された。本号と次号の2回に分けて掲載する。なお、文中に「資料参照」という表記が出てくるが、その資料に関しては紙幅の制約で本誌に掲載できなかった。これに関してはJSAFオリンピック特別委員会のホームページを参照いただきたい。

写真・中島一茂

① ロンドンオリンピックまでの強化策

2004年アテネ以降「セーリングチームジャパン」として万全の組織力をつけていくことを主眼に置き、2008年北京以降さらなる組織体制を強化し、国際競技力向上を目指すとともに、ロンドンオリンピックの目標として「メダル獲得、複数種目入賞」を掲げた。

日本のスポーツ文化を支える企業スポーツ活動も経済環境の変化等により20年前ほどから衰退し始め、オリンピックを目指すアスリート数も大幅に減る中、セーリングもいかに選手強化を進めるか、そしていかに世界との競争力を向上させるかが大きな課題となっていた。そのためには競技団体（以下NF）が魅力ある強化プラン、サポート体制を構築する必要がある。

結果的に北京では企業チームとNF双方が終始「戦うための価値観」を共有することができ470級男子が7位入賞を取ることができた。さらに2009年以降にはそれを一歩進め「世界と戦える選手」（NFオリート、選手ランキングシステム上位者）にあえて対象を絞り、選手間の切磋琢磨を求めるとともに、彼らの競技活動環境の充実と強化推進のための「選択と集中」も実施した。

そして、その成果のひとつとしてマルチサポート（国家事業）の支援を受けることが叶い、かつてない練習環境やコンディショニングサポートを受けることができた。これは470級男女のこれまでの活躍による文科省のターゲットA種目（メダル獲得の期待がある）認定によるもので、北京オリンピックをしのぐ国のセーリング競技への「サポート・バックアップ」を受けられたことはまことに幸いなことであった。

これらの支援は絶大なもので「人・もの・道具・情報」など、この1年間およびオリンピック期間中を通してほぼ完璧なチーム支援体制を構築することができた。道具開発、各種調査の実施、加えて会期以前から長期にわたり管理栄養士、トレーナー、そして情報スタッフが現地入りするなど、ソフト・ハードのフルサポートが実現できた（詳細は後述「③マルチサポート実施事項」参照）。

さらに、フィールド面ではNFと企業チームとの連携を図る試み、コーチ陣の指導力レベルアップを図る取り組みも試みた。またフロント面でも多岐にわたる業務を円滑に進めるために専門職など適材適所の人材の配置もおこなった。

① 選手活動環境の整備・充実

アテネ以降の継続事項として選手個々の努力で世界を目指していた環境を改善するために、物流と補助体制などマネジメント業務をチーム全体で連携することにより、選手のコスト負担を少なくすることが可能となった。

選手が競技活動を円滑にできるように体制を整えることを目的に実力選手の受け入れ先を探し、可能性をもった選手が努力すれば目標達成ができるという環境整備に取りかかったが具体的な成果は挙げられなかった、これは今後も継続して取り組まねばならない。

また、ナショナルチーム（以下NT）としての強化合宿を増やし、チーム・選手個別のコーチだけでなく、種目別NT担当コーチが指導・アドバイスを体制を作り始めた。さらに企業チームから人材が強化組織内部に入るようになり、チーム全体のレベルアップに努め、種目別の横断的なつながりも強化しオリンピック本番での団結力を作ることを目標とした。

② ランキングシステム

アテネ以降、経験値で判断していたオリンピッククラスの实力評価を改めるべく、国際的にトップレベルにいる470級男女を強化の軸におき、国内で活動しているオリンピッククラス8種目に対して、そのクラスおよび選手の国際レベルでの力を参加艇数の違い、参加国数の違いなども考慮にいれ、各世界選手権の成績から個々の実力を判定するランキングシステムを導入した。メダルおよび入賞が狙える種目を見極めていく上の有効な手段と考えた。

またランキングシステムによって艇種別および個人別ランキングが明確となり、海外遠征等における支援内容に反映(差別化)することが可能となった。

◎「選択と集中」の履行(執行)

北京終了2年後の2011年度より、前記ランキングシステムを基に各種目上位NT2チームに対し、より優遇(差別化)した活動環境(遠征費用等の補助支援等)の付与をおこなうこととした。世界上位チームに対等でき得る環境支援となった。

③ 体調管理と栄養管理(事項)

個々にまかせていた体調管理についてもアテネ以降も継続し、国立スポーツ科学センター(以下JISS)でのアスリートチェック、運動能力の向上、負傷や疲労に対するケア、栄養や水分補給などの体のコンディショニング作りに着目し、従来通り年1回JISS合宿を行い、トレーナー、管理栄養士帯同によるNTとしての講習を行った。こうした取り組みによって海上トレーニングだけでなく、フィットネスに対する選手の意識が変わるものと考えた。(資料1,3,4,5参照)



④ アンチドーピング活動

アンチドーピング活動は、早くからADAMS(Anti-Doping Administration and Management System)を導入し、NT選手にはJISS講習時を利用して当該薬に関する指導をアテネ以降継続して徹底した。これまでオリンピック選手レベルに限りドーピングコントロールを理解していたが、これらの指導教育によって抜き打ち検査にも対応できる体制を整えた。

⑤ 広報活動の展開

オリ特的ロンドンオリンピックキャンペーンを内外に知らしめる「広報活動」の柱は一つに「ホームページ(以下HP)をフル活用した情報発信」二つには「メディアへのきめの細かい情報発信と対応」であった。それぞれについてはオリ特メンバー全員の「広報活動の重要性に対する高い認識」に支えられ質・量ともにほぼ構想通りの成果を上げることができたものと考えている。

◎HPを活用した情報発信

HPについてはコンテンツの充実を図り、ロンドンオリンピックに向けたオリ特的組織的動向、考え方、方向性などのフロント情報を適宜発信、またフィールドにおける強化推進活動、内外の強化遠征活動などの姿を迅速かつ正確に伝えることに注力した。HPへの閲覧誘導を増進させるため写真および映像の質的向上を心がけた。

各国国際大会レポートなどにおいても単に結果をレポートするだけにとどめず、参加選手の声、担当コーチのコーチングコメントなども多用して、閲覧する一般セーラーの競技力向上に参考となる技術評価・アドバイスを掲載するようにした。オリンピック前年にはプレオリンピックのタイミングで「ロンドンオリ

ピック情報ページ」の充実を図った。各方面から求められるほぼすべての情報を網羅した。オリンピックキャンペーンを盛り上げるために、専属映像カメラマン撮影の動画も数多く扱い、セーリングの躍動感とその魅力を存分にアピールした。動画導入により閲覧者の数は飛躍的な伸びを見せた。

また、JSAFのWEBマスターおよびJ-SAILINGプログラム担当者とは常に連携し、情報の効果的な伝播への協力を仰いだ。

本番においては現地発レポートとして臨場感を重視したテリーレポートを競技写真ともども発信した。選手らの協力によりレース後の生の声を載せることができたのは幸いであった。

◎メディアへの情報発信と対応

日頃のメディアアリレーションを元に、広範囲なジャンルを網羅したオリ特メディアリストを作成し、北京大会以降機会あることにプレスリリース(HPと連動)を発行した。

JSAFは有力選手を擁していることもあり、メディアからの問い合わせ、照会、取材希望がオリンピック前から殺到し、その対応に追われた。「わかりにくいセーリング競技」だけにメディアへの説明・解説はできる限り懇切丁寧におこなうよう心がけた。

オリンピック年の今年は5月24日赤羽の「味の素ナショナルトレーニングセンター(NTC)」にて日本代表選手団発表記者会見を開催、新聞、テレビなど200名を超えるメディアが出席した。

本番が近づくとつれ、メダル候補選手に対して過熱気味のメディアであったが、その中でも「マルチサポート事業」に絡めた取材が多かったのが印象的であった。また、各選手の出身地のメディアが当該選手らを長期にわたりフォローしていたこともオリンピック大会ならで

はであった。

本番期間中は現地本部に広報担当者が駐在して連日プレスリリースを発行、日本およびロンドンからのメディア対応にあたった。

⑥ プロテスト力の向上とトレーニング

アテネ以降の継続として国際競技ルールの確実なる習熟をはかるとともに、英語によるプロテスト力向上を目的に2006年JISS合宿時より、ルール委員会とインターナショナルジュリーの協力を得て実践講習会を実施した。国際大会におけるプロテスト（抗議）に対する語学対応力を含め、「ルール虎の巻」をNT選手に配布し、オリンピックを含めた国際大会において活用することを指導した。

⑦ 海外遠征と海外合宿の充実

国際セーリング連盟（ISAF）主催の国際競技大会にできる限り出場し「レース感を研ぎ澄まし、レース勘を養うこと」を重点に海外遠征を行った。また、ロンドンオリンピックのセーリング競技会場である英国・ウェーマスの大会には優先的に参加した。同時に、ウェーマスの地が「ホーム」となることを目指した長期合宿も実施した。（4年間でレース参加 合宿はほぼ200日）

② 日本代表選手選考とオリンピック対策

① 日本代表選手選考

セーリング10種目は2011年世界選手権（全種目がオーストラリア・パースで同時開催）で各種目の国枠75%、2012年世界選手権（3月～5月にヨーロッパ各地）で25%を割り当てて、

国枠獲得の予選となった。

日本は8種目での枠取りを目指したが、2011年12月のパースで470級男女、RS:X級男女、ラジアル級の5種目が国枠を獲得した。この時点で470級女子の近藤愛・田畑和歌子組のみが規定成績に達したので、日本代表内定となった。

パースで枠をとったRS:X級男女は2012年3月に世界選手権（スペイン）が開催され、日本人最高位をとった男子の富澤慎と女子の須長由季がともに代表に内定した。

470級男子は5月に世界選手権（スペイン）が開催され、原田龍之介・吉田雄悟組が内定した。

レーザージャシアル級は2月に神奈川・葉山でNT選考レースを行い、その結果によりNT選手の入れ替えを行った後、5月の世界選手権（ドイツ）に参加、最上位をとった土居愛実が代表となった。

パースで枠がとれなかった49er級、スター級、レーザー級は、2012年5月の世界選手権で再度枠取りに挑戦、クローアチアで開催された49er級世界選手権にて牧野幸雄・高橋賢次組が国枠を獲得し、日本代表に内定した。スター級とレーザー級は国枠が取れなかった。

ロンドンオリンピックには63カ国が参加し、フランス、英国（開催国枠）、米国の3カ国のみが全10種目に出場した。また、14カ国が1種目のみの参加であった。日本は上記の6種目9名の選手が参加となった。

② オリンピック本番対策

セーリング会場のウェーマス・ポートルランドを「ホーム」にすることを目標として、準備を整えた。2009年から遠征を繰り返して、オリンピック本番時には選手もスタッフも「ウェーマスへ帰ってきた」と感じるようになった。



2012年 ロンドンオリンピック報告

◎ 現地練習と練習拠点の確保

2009年夏から毎年7～8月に現地練習と大会レースに参加した。練習拠点をキャッスルコープセーリングクラブ（以下CCSC）へ置き、周辺のホリデー用貸家を確保し、自炊しながらの長期滞在と練習環境を作った。いくつかの物件は4年を通して同じものを選んで利用した。

◎ 潮流調査

北京オリンピック前から実施している事項で、英国とフランスを隔てるドーバー海峡（最狭部）は潮流が速いことで知られる海域であり、また、そこに接するウェーマス湾にはポートルランド（鳥）が突き出ており、レース海面での強さ、向きの差が大きいことから、北京オリンピック時に協力を仰いだ東京大学・大学院（海洋空間計画研究室）プロジェクトチームに再度調査を依頼し、専門家グループの協力を求めた。

北京では短期間調査だったため、細部にわたる調査ができなかった反省から今回は2009年より3回にわたり、現地調査を行った。コンピュータによるモデルシミュレーションも合わせて実施し、2012年6月のレース、合宿にてデータをまとめ、本番で配布する資料を作成した。（資料6参照）

◎ 事前合宿と現地入り

6月第1週に本番時と同一海面でワールドカップ大会であるスカンディア選手権が開催され同大会へ参加。引き続き、第1回代表現地合宿を実施、6月末は一時帰国。その後、第2回現地合宿を7月9日から26日まで実施した。7月16日にはアクレディテーションカード保持者全員が選手村に入村した。

第1回合宿時から選手には昼、夕食の日本食が準備された。練習拠点であるCCSCから徒歩3分の所にサポート宿舍

を確保したので、効率よく利用できた。

7月16日の入村以降は、マルチサポートのセーリングサポートハウスを選手村から徒歩10分の所へ開設し、オリンピックが終了するまで選手への食事サポートを続けた。

◎ 現地ホスピタリティー（日本からの応援者対応）

大会会場のウェーマスは日本から遠く、またロンドンから3時間離れた場所であったにもかかわらず、全選手や家族、友人を始め、述べ60名以上の方が応援に来られた。

今大会ではオリンピック・セーリングを「スベクテーター・スポーツ」にするということに大会側が非常に力を入れ、オリンピック・セーリング史上初の観覧スタンド「Notte Stand」が設置された。「Notte Stand」では4500人の観客が陸上からセーリング競技を観戦することができ、風向によってはスタンドに非常に近い場所ではレースが行われ、同時に会場の巨大スクリーンでライブ映像とコメンタリーが観戦をより一層充実させた。選手は自身が出場するレース日につき2枚の観戦チケットが購入できる「Family & Friends Ticketing Program」が大会より導入されたことから、ほぼ全選手がこのシステムを利用し、家族・友人のチケットを手配し、日本からの応援者はほぼ全員この「Notte Stand」で競技を観戦された。

他にISAF本部（Sea Tower）と日本チームの練習拠点であったCCSCの2カ所で開催者の観戦対応を行なった。

ISAF本部はウェーマス・ベイ海岸沿いにあるコンドミニアムに設置し、そこからウエスト・レースエリアが展望できたことにより、日本からの応援者にも開放、望遠鏡は必要であったがレース観戦を楽しんでもらえた。

ハーバー・レースエリアのレースがセーリングクラブ前の海面で行なわれ、日本からの応援者にゲストとして利用してもらったCCSCではクラブハウス内にテレビスクリーンが設置され、BBCで放映されていたNotheコースのライブレース映像が見ることができ、クラブハウス外のデッキ上では望遠鏡でHarbourコースの観戦ができた。

加えて、CCSCメンバーにはハーバー・レースエリアの50m外まで行ける地元艇用のパスが発行され、これを日本チームとして2枚確保し、ゴムボート2艇を選手家族優先の観覧艇として運行した。9選手中8選手の家族・親戚・友人が応援する選手のレースをこのボートで観戦することができ、陸上よりは少し近い位置で臨場感ある観戦ができた大変喜ばれた。

JSAF本部には1、2名のスタッフが常駐、CCSCでは2艇のゴムボートにそれぞれドライバー1名、クラブ内対応として1名、計3名のスタッフで対応した。

このように今大会では3カ所で行なわれる応援者は観戦ができ、オリンピック観戦経験としては大変充実したものになったと思う。加えて、ロンドンから3時間という会場であったため、希望者にはヒースロー空港からのピックアップサービスや宿泊の手配なども連盟サイドで行った。その結果、選手からは自身の応援者に対するケアや心配がなく、競技に専念ができたという声が多く寄せられ、ホスピタリティーとしては十分な成果が得られたと考えている。

③ マルチサポート実施事項

本報告書前文のとおり、マルチサポート事業対象種目(470級)に選ばされ、多方面の有識者、専門家の協力を得てコンディショニング全般、癖のある

ウェーマスの風調査、ヨットのエンジン部分となるセール開発、さらにはセールパフォーマンスを引き出すマスト開発に焦点を合わせて取り組むこととした。また、長期的展望から470級の艇性能解析も行った。

◎ コンディショニング全般

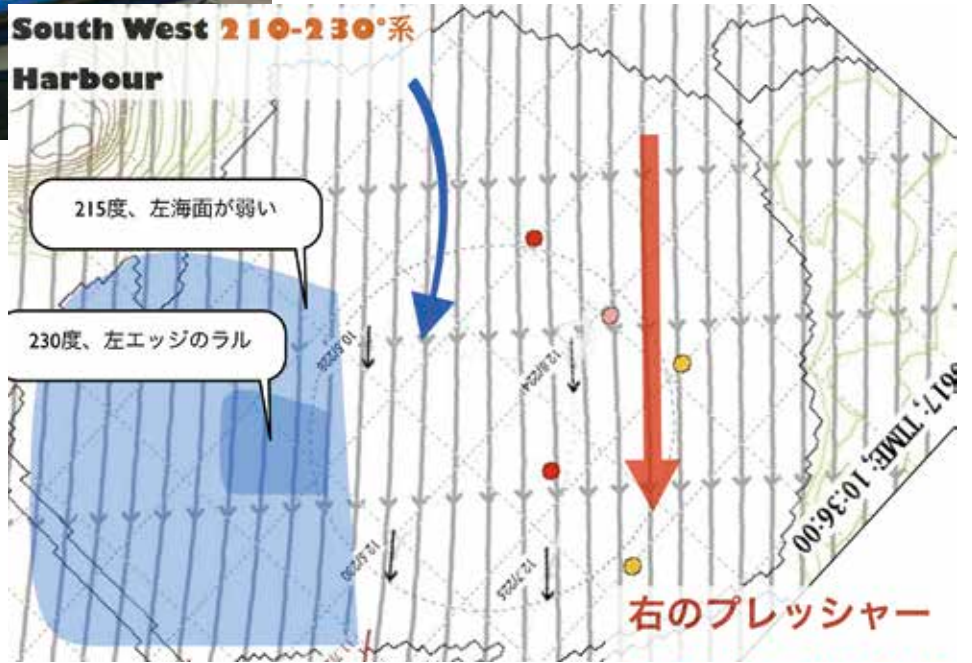
(資料1、3、4、5、マルチサポート報告書 参照)

◎ セーリングサポートハウス

ロンドンオリンピックセーリング競技は会場がサテライト(ウェーマス)であることから、ロンドン本村と同等の選手サポートの希望(マルチサポートの申請)を行ったが、なかなか認められず根気強い交渉が必要であった。結果的にサポートプランが認められ選手への最大限のサポート(栄養・ケア・情報提供)が実現した。

7月16日から選手村に近い場所に開設、フィジカルトレーニング、マッサージ、栄養サポート、コンディショニングチェックを行った。サポートハウスがあるアパルト群にはプール、ジャグジー、ストレッチスペースもあり、利用した。

栄養サポートの食材については、地元スーパーマーケットでの買い出しに加えて、サブンプトンから日本食材の宅配を利用、その他日本から手分けして持参したものを使用した。(資



レース海面の風について、2年をかけて測定船5隻で調査を行った(上)。その結果、右図のようなアウトプットを選手に提供できるようになった(データ提供/オリ特)

料1、3、4、5参照

◎ 風調査

ウェーマスのレース海域は風向によっては地形の影響が出やすい、ローカルな地形変化による特徴があると考えられることから、専門家主導のもと2年をかけて風質の測定船5艇で実際の風を測定した。

測定した風データおよびウェブで一般公開されている地元固定風速計のデータも合わせてコンピュータにインプットし、それぞれの特徴を整理して「見えないう風」を「見える風」に地図上に流線で表し、ウェーマスの風の傾向や癖を整理解析した。短期間での準備ながら、膨大な情報をコンパクトにまとめた。

レース海域の気象情報として本番前年および本番ではセーリングキャリアアを持つ気象予報士を帯同し、細部にわたる日々の気象・海象予測情報を選手・コーチへ提供をした。

大会本番時には風情報との連携を行ない、必要な情報を選手に伝えることができた。(資料2参照)

◎ マスト開発

マルチ研究開発事業要望(2010年9月提出)の承認が遅れたことにより2011年8月より研究開発委託先(ノースセール・ジャパン)有識者とミーティングを行い、開発マストのコンセプト、狙いを明確にした上で設計・製造に着手。2012年1月に新マストが完成した。しかし、その時期にはすでに各種目のオリンピック選考が始まり、470級男子についても2012年世界選手権(6月・スペイン)が最終選考会であることから、この新タイプのマストを積極的に使うことへのNTチームのためらいがあったことは残念であった。

とは言え、男子日本代表になった原田・吉田チームはイェールオリンピックウィーク(強風シリーズ)、470級世

界選手権(全風域)ではこの新マストを果敢に使用し両大会で6位の成績を収め、一定の成果(新マスト効果)を上げたものと思われた。

しかしながらオリピック本番では練習・試合における使用期間の短さから選手が当該マストを使用しない意向を持ち、最終的にはチームの判断として従前からのマストを選択したため、残念ながら本番ではその真価を確認するには至らなかった。(資料2参照)

◎セーリング開発

ロンドン代表選手が決定するまで各チームがチームごとにそれぞれのアプローチを行っていた。

代表決定後にオリピック直前の7月の半ばから末にかけて、調整を行った。

2ポートテストは、GPSを使ったテレメータシステムとマストトップに据え付けられたカメラ、コーチポートからのカメラを使ったノースセーリング社製のシステムを用いて、ポートスピード、セーリングシーブの画面から解析され、セーリングシーブのフィンチューニング、風域ごとのチューニングなどを実施した。(資料2参照)

◎470級艇開発(性能解析)

ロンドンスペシャル470艇の開発を目的に4艇を購入した。世界で一番使用されているビルダーのマツケイ艇(ニュージランド製、各国選手が近年注目を寄せているナウティベラ艇(イタリア製)の性能解析を実施した。この研究(性能解析)を進める中で、時間的に困難であることから艇建造計画は見送りとなった。(資料2参照)

③現地での

コンディションニング

◎競技会場内

6種目以上の参加で、コンテナ2個分のスペースを確保できた。40ftコンテナ1本は北京オリピックで作ったチームコンテナハウスを日本から運びこみ、チームのベースとした。コンテナにインターネット回線(レイトカード申請)を引き、WiFiを設置したので、携帯端末を効率よく利用できた。映像録画、レースの進行状況を確認、様々な情報収

集が苦勞なくできた。今回はチーム全体での情報共有には「ハンドブック」(JIS)を利用したが、コンテナにも掲示をして確認するようにした。

また、32ftコンテナはマルチサポートの1環で地元でレンタルし、半分をアットプクルダウン用ストレッチスペース、スピニングバック置き場とし、残り半分は作業台と予備品、工具の保管場所とした。(資料1、3、4、5参照)

◎セーリングサポートハウス

(資料1、3、4、5参照)

◎医療関係

事前にロンドン選手村(本村)のドクターとの連絡網、分村医務室、競技会場医務室等を確認したが、実際には病気、怪我ともになく、無事に大会終了まで過ごすことができた。

ウエーマスでは選手、スタッフが1名ずつが歯科治療を受けたが、設備も整っており問題はなかった。ただし、歯科医は日本語が通じないと治療が難しいこともあり、改めて、歯科については現地入りする前に問題を解決しておくことの必要性を感じた。

(※後半は次号で掲載いたします。)

〈資料リスト。オリ特 HPに掲載しています〉

- 資料1 国立スポーツ科学センターサポート活動報告
 - 資料2 ロンドンオリピック・マルチサポート報告(鹿取)
 - (1)ウエーマス風調査 (2)470級マスト開発、
 - (3)470級セーリング開発 (4)470級艇体性能解析
 - 資料3 ロンドンオリピック・コンディションング報告(江口/前田)
 - 資料4 ロンドンオリピック現地栄養サポート報告(武田)
 - 資料5 ウエーマス潮流調査報告(東大潮チーム)
 - 資料6 選手レポート纏め(中村/飯島)
- ※この他に資料として、詳細な成績表がある。



2012年 ロンドンオリピック報告



RESPECT THE ELEMENTS™



www.gill.jp
Fortune Corporation
info@gill.jp

420 WORLDS RESULTS

'09 420 World
Men's 1st Women's 1st 3rd

'11 420 World
Women's 1st 3rd 4th 5th

'12 420 World
Open Class 1st 3rd 4th 5th
Ladies 1st 2nd 3rd 4th



420 WORLD WINNING SAILS

M-9

J-12

S-01

S-05

470 クラスのメジャーレガッタでの連戦連勝、五輪五連覇の偉業を成したノースセール・ジャパンのラジアルカットセール。

その DNA を受け継いだ 420 クラスセールは、すでに世界選手権での優勝や、ヨーロッパのメジャーレガッタで好成績をマークし、世界中のユースセラーから最も注目を浴びています。

470 クラスで世界を席卷し他のワンデザインクラスでも数々の実績を残し続けている唯一無二のデザインシステム、テストシステムと世界最高峰のクオリティを提供できるクラフトマンシップ。

ノースセールジャパンはその精力を 420 クラスセール製作にも余すところなく注いでいます。

**ノースセールは未来の
オリンピックセラーを応援しています。
ともにオリンピックの表彰台を目指しましょう！**

Faster by Design



www.jp.northsails.com

本社・横浜ロフト 045-770-5666

関西ロフト 0798-26-7771

北海道ロフト 0134-25-3227

info@jp.northsails.com

トレーニングセール近日発売予定。
詳細は WEB サイトにて。

Radial for All

進化し続けるノースラジアルセール。
そのアドバンテージをすべてのセラーに。

参加15艇、琵琶湖の〈音丸〉が優勝!



第32回全日本ミニトン選手権大会は2012年10月6日～8日、鹿児島市のKMSヨットヤードをベースに谷山港沖、錦江湾で行われた

レポート/レース協会 写真/剥岩政次



全15艇のスタートシーン

■1日目

初日、スキッパーズミーティングの後、参加全15艇が出艇。

レース海面は火山めぐりヨットレースでも使用された北東に桜島を望む鹿児島市沖を使用しました。上下のソーセージコース4レースとインシヨア1レースの計5レースの予定。

第1レースは14時30分に定刻どおり東寄りの風でスタート。途中で風が落ち、2上でコース短縮となりました。

1位から12位まで接戦だったこのレースを制したのは第1マークからトップを守った〈ORTHO ONE〉(鹿児島)で、修正も1位。2位には着3位の〈万天〉(琵琶湖)、3位には着5位の〈音丸〉(琵琶湖)でした。この日は1レースのみで終了。

その後、午後7時から南国ムードあふれる奄美の里にてウェルカムパーティ開催。参加艇の紹介や今回の大会参加の抱負を発表し閉会となりました。

■2日目

2日目の第2レースは2～3mほどの北風で、9時05分にスタート。このレースは〈音丸〉が終始フリートをリードしトップ・フィニッシュ。2位には着2位の〈Condition Green〉(鹿児島)、3位は着4位の〈万天〉が入りました。

つづいて行われた第3レース、〈Condition Green〉と〈ペガサス Jr・YC〉(鹿児島)がトップ争いをしますが、風が落ちていく中、〈Condition Green〉が29秒差で〈ペガサス Jr・YC〉を振り切りトップ・フィニッシュ。3位には〈CENTRO〉が入りました。

このレースは最後のレグで風が落ち、15艇中8艇がDNF。その後、無風が続く、レース委員会はこの日のレースは行わないことを決定、ハーバーバックとなりました。

この日の夕方、ホストクラブである外洋南九州主催のフレンドシップ・パーティが開催され、約140人ほどの参加者が和気あいあいとした雰囲気を楽しみました。

■3日目(最終日)

迎えた最終日、ここまで3レース成立で〈Condition Green〉が9点、〈音丸〉が10点、〈万天〉と〈ORTHO ONE〉が12点と接戦の様相です。

この日はレース委員会よりインシヨアもしくはバイ周りを2レース行うとの通達。海面に着くと桜島は北東の風で、火山灰が市街地方向にかなり強く流れているものの海面は弱い北風。

第4レースはソーセージコースで9時05分にスタート。

2～3mの弱い風の中〈ORTHO ONE〉と〈ペガサス Jr・YC〉が終始リードし、着順は〈ペガサス〉が1位、〈ORTHO ONE〉が2位。しかし1分半のあいだに7艇が入り、修正では1位〈音丸〉、2位〈CENTRO〉、3位〈万天〉の順でした。

その後、続くレースに備えますが桜島から入る風がレース海面まで届ききらず、4レースを持って終了となりました。

結果、優勝は〈音丸〉、2位に〈万天〉、3位は〈Condition Green〉となりました。

第32回全日本ミニトン選手権成績

- 1位 音丸
- 2位 万天
- 3位 Condition Green
- 4位 ORTHO ONE
- 5位 ペガサスジュニア
- 6位 CENTRO
- 7位 KARIN
- 8位 神瀬 Jr
- 9位 Luna Pepper
- 10位 航龍II
- 11位 SACHI・Jr
- 12位 海坊主
- 13位 PEANUTS
- 14位 Enbo Girls
- 15位 アルテミス



優勝の〈音丸〉(オーナー/桑南伸行、Y23 II、琵琶湖)



参加メンバーの揃い踏み

TOKYO NEWS

THANKS!
50
YEARS



TVBros.

TV Taro

B.L.T.
BEAUTIFUL lady TELEVISION

日刊
TVガイド

DIGITAL
TV
GUIDE

スカパー!TVガイド
2013.7.4

スカパー!TVガイド
BS+CS

TOKYO
NEWS
MOOK

VISION
Good Come

GC
Good Come

since 1998
インターネット
TVガイド

TVガイド
7-11

新聞ラジオ・テレビ欄配信

株式会社 東京ニュース通信社

〒104-8415 東京都中央区銀座7-16-3 日鐵木挽ビル TEL.03(6367)8000(代表) www.tokyonews.co.jp



ミズノは2020年の東京招致活動を
応援しています。



うまいぞ、
長尾くん!

名前で
呼ばれ
ちゃった…。
(ドキドキ)



会えるのは、
室伏選手だけじゃない。

21競技、300名以上の有名アスリートが
講師に登録。ミズノのスポーツ振興イベント
「ミズノビクトリークリニック」。

キミも、有名選手に会えるかも! 「ミズノビクトリー
クリニック」は、オリンピックや世界大会など…
さまざまな舞台で活躍したミズノの契約選手や
社員選手を講師に招き、実技の指導や講習、サイン
会やトークショーなど行うイベントです。講師に登録
している選手は21競技300名以上。スポーツは
もっと好きになると、きっと、うまくなるよ。



スポーツの楽しさを伝え、広めています。

開催レポートはこちらから… Victory Clinic <http://www.mizuno.co.jp/victoryclinic/mizuno.jp> ☎0120-320-799



五輪種目に返り咲いたRS:X級

RS:X級、再びリオ五輪正式種目に決定

5月のISAF ミッドイヤー・ミーティング（イタリア）にて、RS:X級に替わりカイトボード級を採用するという衝撃的なニュースから半年、11月ISAF年次総会（アイルランド）にて、RS:X級は正式種目に返り咲くことが決定した。

本決定に至るにあたり、当協会理事の相談に快く乗っていただき、多大なるご支援ご協力を賜った河野博文 JSAF 会長、大谷たかを ISAF カウンシル、堤智章 JSAF 国際委員会委員長に改めて深く御礼を申し上げたい。

詳しい経緯は本誌 P8～P9 の堤氏のレポートを参照いただきたいが、これ

までの決定を覆せた大きな要因が日本、JSAF の起案からという事実は非常に意義深いと思う。

一方で、カイトボード級が五輪正式種目として一定の評価を得たことも事実である。

今後は特定艇種 VS ウインドサーフィンという構図ではなく、セーリング競技をより発展させるために当協会は何をしなければならないか、をより真剣に考えるきっかけになったと考えている。JSAF 及び各艇種及び委員会との連携を密にし、セーリング競技の一層の発展に寄与する決意を固める次第である。

2012年度 全日本学生ボードセーリング選手権・個人戦 沖縄で開催



インカレ優勝の立命館大・板庇雄馬（左）と、同志社大・吉本江里菜



11月5日～7日、沖縄県国頭村・JAL プライベートルリゾートオクマにて2012年度全日本学生ボードセーリング選手権・個人戦が開催された。

支部戦を勝ち抜いた男子105名、女子52名、総勢157名が全国各地から集まり、全9レースが行われた。今年度の注目選手は、2年生ながら今年度学連ナショナルチームに最年少で加入した板庇雄馬（立命館）、また昨年インカレで同じく2年生ながら3位入賞を果たした小森貴裕（関西学院）、全日本選手権3位に入賞した内山俊樹（明治）、そして地元、金城隆太郎（琉球）などの名前があがる。

一方、女子の注目選手は、昨年2位に入賞した福田未那弥（明治）、全日本選手権総合で5位に入賞した大江沙也加（関東学院）、中部選手権で2位入賞した吉本江里菜（同志社）などだった。

11月5日（男子第1～4R、女子第1～3R）

北北東7～8m。陸上では風があまり感じられず、多くの選手が微風セッティング。コースはトラペジッドで女子がアウトターン、男子はインナーターン。

女子第1R。下から福田、大江、江尻新奈（東京海洋）が好スタート。左海面の江尻が1位、続いて大江、福田、五十嵐（横浜市立）と続いた。男子第1Rでは、1上をトップ回航した熊本（同志社）を板庇が逆転し1位。

女子第2R。平均8～9m、最大10mの強風下、トップは吉本、続いて吉田、江尻。男子は中央よりも少し上からスタートし左海面からのブローを使った熊本が1位、以下内山、小森、平田（琉球）が続いた。

女子第3R。11～13mの強風下、ダガーとブレー

キングで上る選手が入り乱れる中、トップ集団はダガーで耐え、吉本、大江、吉田の順でフィニッシュ。

男子第3、4Rは強風を得意とする内山と板庇がそれぞれトップを分けた。

11月6日（男子第5～7R、女子第4～7R）

大会2日目は昨日と違って変わり晴天。北～北北西で平均6m、最大9mで、オクマ特有のガスティーコンディション。

女子第4R。上スタートの吉本が後続に圧倒的な差をつけ1位。2位には江尻。

男子第5R。金城が終始トップをキープするも田中（京大）が逆転、以下金城、板庇が続いた。

風は再び吹き上がり、平均8～9m、最大11mとなった女子第5。上から好スタートをきった吉本が圧倒的な差をつけ1位、大江が続く。

男子第6Rは2上で右海面のブローをうまく使った内山、長谷川の明治勢が1、2フィニッシュ。

女子第6Rは1上を五十嵐、江尻らの関東勢が制すも吉本が逆転。吉本は続く第7Rも1位を取り、本日全てのレースでトップフィニッシュを飾った。

男子第7Rは、古田と田中の京大コンビが1上をトップ回航したが、板庇が逆転しトップ。

大会2日目までの順位は、男子1位 板庇（16p）、2位 内山（21p）、3位 平田（35p）。女子1位 吉本（6p）、2位 大江（13p）、3位 江尻（17p）。

11月7日（男子、女子第8～9R）

大会最終日は平均4～6m、最大8mと今大会初の

中風域での戦いとなった。奥間特有の難しい海面によりまだまだ優勝者は判らない。

女子第8Rは中風域が得意な福田が終始レースを引っ張り1位。男子第8Rは金城がスタートから飛び出し独走、そのままフィニッシュ。この段階で1位の板庇が続く。

女子最終レース1上を須田（横浜国立）が制すも第8Rに続き福田が逆転、最終レースを飾った。

男子最終R、内山が板庇に7p差つけてフィニッシュすれば逆転（優勝となる緊迫のレース。ここでも地元金城が終始レースをリード、最終日全2Rをトップフィニッシュで飾った。一方ここまで1位の板庇は終始2位の内山を抑えきった。

結果、2年生の立命館大学板庇雄馬が昨年の悔しさを晴らしインカレチャンピオンに。

女子は6R連続トップフィニッシュを飾り、圧倒的な走りを見せた同志社大学4年吉本江里菜が同じく栄冠に輝いた。

お詫びと訂正

前号の国体ウインドサーフィン級における掲載写真に誤りがありました。BIC社 techno2930Dのボード写真は右のとおりです。関係各位にご迷惑をおかけしたことをお詫びし、ここに訂正させていただきます。



BIC techno2930D

Full Speed Ahead

Carrying dreams, Carrying the future

子供たちの未来が輝かしいものであって欲しい。そのために私たちは運び続けます。
ヒトやモノを運ぶことが、夢を運ぶことにつながると信じて。船だからこそできること。
商船三井だからこそ、できることがあります。 www.mol.co.jp

MOL 商船三井

CATCH THE WIND

YAMAHA
SAILING CRUISER
&
DINGHY SERIES



●お問い合わせは.....
○ディンギーヨット/ オクムラボート 販売株式会社 〒671-0111 兵庫県姫路市の形町の形2013 tel.0792-54-5630 <http://www.okumuraboat.co.jp>
○クルザーヨット/ ニュージャパンヨット株式会社 〒421-0502 静岡県牧之原市白井7-9 tel.0548-54-0221 <http://www.njy.co.jp>

NOTICE BOARD

ノーティスボード

新年会のご案内

JSAFの平成25年の新年会が下記の要領で開催されます。
ご多忙の折りですが、メンバー各位はご参加いただけますよう案内いたします。

新年会開催概要

日時：平成25年1月26日 18時30分～20時
場所：日本スポーツマンクラブ 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館内1階
会費：5,000円

ご出欠のご返信は、1月21日までに、本誌J-SAILING 98号送付時に同封されている用紙を使用してファクス、あるいは必要事項を明記の上eメールでご連絡下さい。

FAX 番号 03-3481-0414 e-mail : jimukyoku@jsaf.or.jp

JSAF カレンダー販売中！

「2013年JSAF カレンダー」が完成しました。今年のカレンダー各月のラインナップは下記のようになっています。

- 表紙：ロンドン五輪ウインドサーフィン級（富澤慎選手の走り）
1月：JSAF 江ノ島オリンピックウイーク
2月：東京湾ヨットレース
3月：全日本学生ヨット個人選手権大会
4月：メルジェス32世界選手権
5月：ロンドン五輪レーザーラジアル級（土居愛美選手が写っています）
6月：沖縄・東海ヨットレース（優勝艇くべンガル7号）
7月：ジュニアヨット復興ジャンボリー
8月：全日本シニアヨット選手権
9月：全日本モス級選手権
10月：キールボートシリーズ相模湾
11月：ロンドン五輪49er級（牧野幸雄・高橋賢次組が写っています）
12月：JYMA 選抜大学対抗マッチ

ご希望の方は、本誌送付時に同封されている用紙を使用するか、下記URLにある申し込み書に所定の事項をご記入の上、ご送付いただけますようお願いいたします。
URL <http://www.jsaf.or.jp/honbu/news/2012/news-12.pdf>



2013年JSAF
カレンダーの表紙

ルール・ブック 2013-2016が発行されました

「セーリング競技規則 2013-2016」、「セーリング装備規則 2013-2016」、「日本セーリング連盟規程」が含まれているルール・ブック 2013-2016が発行されました。これらの規則は平成25年1月1日から適用されます。

定価3,500円、JSAF会員価格2,800円。
12月からJSAF加盟団体・特別加盟団体にて販売します。

セーリング競技規則（RRS）は4年に1回、オリンピックの翌年に改定されます。今回は前回と比べてインパクトの大きな変更はありませんが、やはり多くの箇所での変更があります。

もっとも際立って戦術に影響を与える点は、定義「マークルーム」と規則42.3「例外」の「バテンが裏返っている場合」にあります。マークルームの意味が変更され、また、ある条件を守れば裏返ったバテンが正しく戻るまでポンプが可能となり、実情に合わせた改定であるとも言えます。

他にも、定義「フィニッシュ」や定義「避けている」。規則20の変更はセーラーの戦術を変えるでしょう。

一方で、基本原則に「環境責任」が追加され、規則55「ゴミ処理」が追加され、競技者は環境への意識も持たなければいけません。また付則B、D、Eがほぼ全面改

訂され、付則F「カイトボード」が追加されました。付則Lでは「U旗」が規則30.3「黒色旗」の代替として使用できるようになっています。

セーラーの疑問に答える「理解しやすい」RRSとするために、日本語訳を変更している箇所も多くあります。新たな戦術が展開される1月1日以降のレースに備えてください。



読者プレゼント

P23で紹介しました第32回全日本ミニオン選手権大会のレース委員会から読者プレゼント用にTシャツを提供いただきました。また、今夏、行われた第53回パールレースのレース委員会からもTシャツを提供いただきました。

サイズはすべてLサイズです。抽選で6人の方に差し上げます。

ご希望の方は、氏名、住所、電話番号、JSAF会員番号を明記の上、下記まで電子メールでご応募ください。なお、当選の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。

present@jsaf.or.jp

私たちは、BNPパリバです。



BNPパリバグループはその支店や子会社を通じて世界各国で業務を提供しています

◎日本における主要法人：BNPパリバ証券株式会社（証券・投資銀行業務）／BNPパリバ銀行（法人向け銀行業務）／BNPパリバ インベストメント・パートナーズ株式会社（資産運用業務）／カーディフ生命保険会社／カーディフ損害保険会社（保険業務）

www.bnpparibas.com
www.bnpparibas.co.jp

The bank for a changing world



BNP PARIBAS

YANMAR

Solutioneering Together

100th
ANNIVERSARY

目指すゴールはひとつ。

世界的セーラーPeter Gilmour率いる「YANMAR Racing」は、様々な国籍を持つクルーが力を一つにゴールを目指すプロセーリングチームです。私達ヤンマーは、世界130カ国以上の海・大地・都市を舞台に、総合力で人々の暮らしに笑顔と満足を提供します。



YANMAR
Racing

www.yanmar.co.jp/en/racing/

〒530-8311 大阪市北区鶴野町1番9号 梅田ゲートタワー **ヤンマー株式会社**

病院部門

北柏リハビリ総合病院(217床)

健診センター

柏健診クリニック
汐留健診クリニック

クリニック部門

西浦眼科
まちや外科内科
梅郷整形外科クリニック(13床)

訪問看護ステーション

北柏訪問看護ステーション

在宅福祉事業部門

エンゼルサービス野田(訪問介護)
エンゼルサービス柏(介護ショップ・訪問介護)

介護老人保健施設部門

梅郷ナーシングセンター(124床)
北柏ナーシングケアセンター(120床)

介護老人福祉施設部門

みゆきの郷(120床)
流山こまぎ安心館(110床)

介護福祉部門

梅郷ナーシング居宅介護支援事業所
北柏リハビリ総合病院居宅介護支援事業所
居宅介護支援センターみゆき
居宅介護支援事業所 こまぎ安心館

研究部門

日本成人保健医療問題研究所



「感謝な心」で
信頼の医療サービスを
ご提供いたします

天宣会グループ

〒277-0021 千葉県柏市中央町1-1 TEL 04-7167-6667(代表) www.tensenkai.or.jp

CASIO

シンプルな操作でワールドタイム29都市をサクサク切り替える【スマートアクセス】搭載。さらに、2都市の時刻を文字板上で同時表示する“Watch in Watch”コンセプト。サクッと、世界へ。オシアナスS2400



デュアルタイム表示 3時位置に、独立した2針のAM/PM表示
付きインダイヤルを搭載、2カ国の時刻を同時かつ明快に表示する。

AM/PM表示 12時間表示

Elegant Style + Smart Access

電波ソーラーのフラッグシップとして。

Elegance, Technology

OCEANUS
Master

2つの都市に
同時にアクセス。



OCW-S2400-1AJP ¥150,000(税込¥157,500) oceanus.casio.jp

国際VHF無線用免許講習会

舵社主催
KAZI マリンスクール
海上特殊無線技士講習会を
10%割引で受講できます

**JSAFメンバー
限定割引**

専用申込書が 必要です

お申し込みには、JSAF会員限定の専用申込書が必要です。専用申込書はJSAFホームページからダウンロードするか、KAZIマリンスクールまでお電話でご請求ください。

[お問い合わせ・申込用紙請求先]
JSAF外洋安全委員会ホームページ
jsaf-anzen.jp/1-7-2.html
KAZIマリンスクール
TEL 03-3434-0941

必ず
JSAFメンバー
専用申込書と
お伝え下さい。

お申し込みは、 ファックスで、 JSAFまで

お申し込みには、JSAF会員限定の専用申込書に必要事項をご記入いただき、JSAF外洋安全委員会までFAXにてお申し込み下さい。

[受講申込みFAX送付先]
JSAF外洋安全委員会
FAX 045-544-5813

お支払はカード、 現金書留、 お振込等で

JSAF外洋安全委員会にお申し込み後、KAZIマリンスクールより受付確認の連絡を入れさせていただきます。その際にお支払方法をご指定ください。各種クレジットカード、銀行振込、現金書留でのお支払がご利用いただけます。また、システムKAZI会員の方はシステムKAZI自動引き落としもご利用いただけます。

第3級海上特殊無線技士

[受講料] 23,000円 ▶ **JSAF会員
限定価格 20,700円(税込)**

(免許申請料、教科書代含む)

国際VHF、5Wまでの運用ができる資格です。1日6時間の講習を受講し、修了試験に合格すると資格を取得できます。どなたでも受講出来ます。

第34回
東京
教室
2013.3.24 (日)
AM9:00-PM6:30

[会場] LMJ 東京研修センター 5F 特大会議室
東京都文京区本郷 1-11-4 小倉ビル(東京ドーム近く)
[定員] 50名(定員になり次第閉め切らせていただきます)

第35回
名古屋
教室
2013.4.21 (日)
AM9:00-PM6:30

[会場] ゼミナールプラザ第三会議室
名古屋市中区正木 3-7-15
[定員] 40名(定員になり次第閉め切らせていただきます)

(軽減コース)

第2級海上特殊無線技士

[受講料] 28,000円 ▶ **JSAF会員
限定価格 25,200円(税込)**

(免許申請料、教科書代含む)

第2級は国際VHF25WまでとDSCの運用が出来る資格です。軽減コースは第3級からのステップアップコースで、第3級海上特殊無線技士資格を持つ人のみ受講可能です。1日7時間の講習を受講し、終了試験に合格すると資格を取得できます。

第20回
東京
教室
2013.1.27 (日)
AM9:00-PM7:30

[会場] LMJ 東京研修センター 3F 大会議室
東京都文京区本郷 1-11-4 小倉ビル(東京ドーム近く)
[定員] 50名(定員になり次第閉め切らせていただきます)

第21回
大阪
教室
2013.2.24 (日)
AM9:00-PM7:30

[会場] 此花会館 402、403号
大阪市此花区西九条 5-4-24
[定員] 50名(定員になり次第閉め切らせていただきます)

●最新の講習会日程については、KAZIホームページをご覧頂くか、KAZIマリンスクールまでお問い合わせください。●各回定員になり次第締切となります。●申込書をご送付いただいた場合でもお断りする場合があります。●受講料入金時をもって正式申込みとさせていただきます。●完全予約・定員締切制のため正式申込み後の日程変更および返金はできません。

受講申込みFAX送付先
JSAF外洋安全委員会

FAX 045-544-5813



NO.98

「第77回全日本学生ヨット選手権」(11月1~4日、滋賀県大津市柳が崎ヨットハーバー)で総合優勝を果たした同志社大チームの喜びの1シーン。来年は兵庫県西宮で開催される。(写真/平井淳一)

メッセージ

「想定外」というめったに耳にするはずのない言葉が、このところ頻繁に用いられるようになりました。このやっかいな「複雑系」の問題に対するツールも研究されていて、「適切なトレードオフの模索」という手法があるそうです。複雑系は予測もつかないような変化や偏りが生じるので、対応するには多種多様な人材を組織に確保する、交渉力も伴う大きな作業なのですが……

5月のISAF会議で「想定外」のkiteボードの採用議決は、11月に行われた年次総会で未曾有の「想定外」でウインドサーフィンに戻されました。その陰にはISAFカウンスルメンバーでもある大谷たかを氏をはじめクラス協会、国際委員会などJSAF関係者の他国への働きかけなどの大きな作業によるものでした。皆さんの交渉力に敬意を表します。

広報委員会 J-SAILING編集人 柳澤康信

平成24年度賛助会員

ロンドン募金 寄付・協賛社

巴工業 山本光学 ラジエ工業 (株)ジェイ・ウィル・パートナーズ 医療法人健育会
中村興業(有) (株)TESホールディングス (株)ヘルスケアシステムズ アビームコンサルティング(株)

環境キャンペーン・協賛社

JFEホールディングス(株) ヤンマー(株) (株)トーヨーアサノ (株)ノエビア・ホールディングス
テクノヒル(株)

外洋キャンペーン・協賛社



45rpm studio co., ltd. 

JAPAN AIRLINES



新しい翼で、世界の空へ。

昭和42年12月25日第三種郵便物認可 平成24年12月25日発行 通巻452号

J-SAILING

JAPAN SAILING FEDERATION

定価300円

NO.98



明日の空へ、日本の翼